

函番號	上 / 號
種別	國
種別	號
番號	32,27
月	日
日	月

919.5  
338  
Vol. 14





常山紀談卷之十四目次

一 細川忠興の北ホソカハ北キタ方カタ義死ギシの事

一 安養寺門齋アキヤウジ三成モウサイを生捕イケトラ人とせし事 附 姉川合戦アネガハの時トキ門モン急キウ

一 生捕イケトラまじし事 并遠藤喜右チニドウ系ケイつ討死ウチシの事

一 大津城合戦オホツ京極家キヤクゲの士戦功シセンクウの事 附 赤尾伊豆アカオが事

一 十時傳右トシキ系ケイつ山田三右ヤマタ系ケイつ死骸返シガイガヘしシの事

一 高次大津タカツの城シロをゆユきし事

一 立花家足輕鉄炮タチバナの用意ヨウイ 附 細川家ホソカハ口茶入クチチヤウイ吉田大藏ヨシタ猿サルの事

一 伏見落城フシミの事 附 鳥居忠政トリイ雜賀孫市サカハを餐イハまじし事

一 村上三右ムラカミ系ケイつ大島源一オホシマ武者振ムシヤブの事

一 三刃谷監物ミトヤ田邊城タナベを籠コメる事



田邊城 勅命小依と和平の事 附 細川幽齋古今集傳授の事

古田助左衛門 思慮の事

高松大將の如く出陣の事

竹田新治の如く山田三右衛門の事

大和郡合戦 赤松家の士陣の事

大和郡合戦 赤松家の士陣の事

大和郡合戦 赤松家の士陣の事

大和郡合戦 赤松家の士陣の事

大和郡合戦 赤松家の士陣の事

大和郡合戦 赤松家の士陣の事

大和郡合戦 赤松家の士陣の事

常山紀談卷之十四

備前國 湯淺新兵衛元禎輯録

○細川忠貞の北北方ハ 明智光秀が女たる父謀反の時忠貞は

向ひやされたるハ父あがつかるゝくはてして事よくやのり

ともおもえられど滝川柴田などや人々多々まじり必軍敗る

女は淺た智慧も口をくくこそ存け男の身も

よは鎧此袖よまがりても誅めやぶきを力なり君あり

まよせむひちあバ世の譏いうぐわりのがまよせあつんと涙は沈ま

まよるバ忠貞光秀よ同心なりりり其後程経て秀吉

伏見よ有る諸大名此の方を呼入るる食まつ事あり

お忠貞の北北方かくとや女の人なくく一間よ入る他人



まゝの事やあることにも召まんとなつて懐七首  
を用ゑせしむる此より秀吉の悪行ハやとて石田西  
國の諸將をかゝるひく兵を起す時諸大名の北の方を  
大坂城中よ取入んとするを北の方で傳は付らまゝ河喜  
多石見稻苗伊賀小笠原正齋を呼ぶ吾此所を知らん事  
名ひもよふと城中よ取めらまゝハ恥辱なりよく断を  
りて入らまゝハ是を限と思ひ定むべしと語られし  
正齋殿東國よ向をせまひ一時むらひけさる事にあん  
よハ正齋をくひく武將の恥なすこと仰せしむ  
敵奪ひこゝんとするなれば其時思召切せぬとやしかり  
かゝる処は城中よ入よと使を以てしむる再三断の旨を

述べども入らば七月十七日の未刻をりよ大坂の軍共五  
百餘り王造口の屋敷をとりまたとて城中よ入らせ  
よはれどハ乱入し奪取んと呼りりて女房たるあはて  
泣悲めども此の方ハさうく色もなかくかくあんとハ兼  
ておのひ設つる事ぞよハ正齋ハ錯せよ日れ生る世ふま  
えりし人々死しその後も見らまゝんハよろしくとて面  
覆面打ちけくを袴を抜胸よはらたせられし  
くば正齋眉尖刀をくハ錯し其のくそよて腹を切んと  
せし怨の正齋が小姓をく来て殿の北の方と同よ自害  
あゝ後の誅のらべきと云われハ正齋あまりのいふ事  
障子の外よ走りお家よ火を懸け石



見とせし腹切く炎の中は死しとりて伊賀ハ光秀よ  
附らましし身あれを遁るべたさもあはし人ふまはましく  
落うせくら

忠奥後よさぐしやして誅せんとせしころを松平忠

吉伊賀ハ無双の鉄炮此妙もあまこバ助け並く若ののよ

教へさせんと志しむく乞まししバ忠奥力なくと止り

伊賀ハ世の交もあく髪をとそり一夢といひかり百獲百

中のよたまこなりし人も人多き中よてハ大まき

めのと申らさるしとぞ

忠奥の北北方かかやおのしとく人むかひの

きすすく硯の中よ入らましし哥よ

先さハあしうたりの令中よあさうてをり契とを忘れ

落おる女房の取傳へく世よあはるるとなんおの方ハか

てかくゆんとおももまししは幽齋の妹年老く宮川殿

とやせしと忠隆の北北方前田利長の妹と小吾ハ人志ちよまさんと世

の物いひれやどよ落失むやと存るに同ド、そのあひまに

べられど人多くハ中くうた目やんしゆのんらんとく此

隣の築地一を踏く落させ多人やとて宮川殿ハ建仁寺忠隆

の北北方ハ浮田秀家の北北方よ忍び行く此禍をのがまて

アコクや誠よ義烈のまよ何ぞ謀もやしき人ありと

語ア傳へく袖をぬきぬ人もたし

○三成兵を起さ時大津の城よ入る京極高次よ對面し



秀頼公の味方有へしとぞヤク高次の士は安養寺門齋と  
云く者黒田伊豫よ向ひ今三成城中に入る事誠の天の命  
ふるまたりかめ取く関東はなると云黒田守く三成  
を生捕とも西國の諸將大軍よく攻囲むといくぞ防ぎ術  
のあまきとて向入び門毎あざ笑ひ三成ハ破るハ乱の首  
なり其餘ハ手足のぬき首を碎くやどなくバ手足何の恐  
のりべたきくくおききも固くもりて戦ふ一軍せは  
一も三成を生どるちくバ天下は名を揚勲功難うあらばま  
吾年老ぬもどく三成をかめん事ハ忠とやとくんとく  
今村掃部をも勸いりくも争論は時移アくく三成城を少  
々り門齋ハゆと浅井長政は任へ姉川の軍小生どくも龍

鼻の陣よく信長の前より引かぬ信長の曰く勝は奪て小谷  
を打破らんとおふハいりく汝が命を助けらん此勝敗いある  
べたと向ふく安養寺の集り長政が父下野守小谷は有く  
其兵三千計りやれひまん然る小疲まくる兵を以てか後  
がらしく攻らまといりん事然るべくくばとて信長おろあづ  
いりく取く首どもおきて安養寺よんせく其姓名を  
向く中おも竹中久作が取く首をいりく遠藤喜右衛門直  
継とて老いといりある有根よいりくと向

久作ハゆと齋藤家の士信長よ奉公しり姉川よ浅井  
の士遠藤喜右衛門直継云くハ信長登、かすくちり夜々  
横山の城を攻信長北本陣を一夜射せハ勝利疑



なりしつゝ長政是を用ひざるにけり。國をなぐして  
浅井の家危きまゝ朝夕はつり軍敗まん時信長を討ん  
者ハ吾なりといひつゝがいつる。朝またがりず首を刀の鋒  
よつゝめた大將の实檢よそたえんと云く信長の旗本よ  
来りたるを久作討取り久作かきて必遠藤を吾討取  
る。と人ぞいふ。いふあるある。向小其子細二つ  
あり。江州より遠藤と相知よく足知り。是一つ彼ら  
す。剛の者少て力あくまです。さうり常小進む先  
ぶらゝ退く。後る是二つといひ。が果して直繼が首を  
得しり。

竹中聞く首一ツ提殿ハいづくまの。と云てちづき進

と来りしもの敵のまがれ入る殿を切奉るたうんとといひ  
引組む討取りと語り。はたはた依山よりくめり軍破ま  
ひあゝバ必生る帰ら。信長を一太刀恨まやさんと遠藤がい  
ひつゝが果して其詞めくなりきといふ

遠藤ハ浅井家よ名有る剛の者なり。信長江州佐和山  
みく始めく長政よ對面あり。公方義昭の歸京北次小佐々  
木承禎を攻打べき事を裁し。長政も力を合はむまといひ  
の約を定め岐阜よ歸ら。とて江州柏原よ宿せ。其  
浅井縫殿中嶋助九郎遠藤喜右衛門三人弛走の為柏  
原よ行り。遠藤早馬より小谷よ歸り。信長を見り  
武勇猛あり。謀あり。た人なり。浅井家とくめり



かへんぎ事終ひたり今日決断せしめし臣信長を  
刺殺しやんし其勢ひよみて美濃を攻入らるると云  
長政めて一度約して変せん事本意よ此ほどとて  
直継再び柏原に赴き信長をめてたり信長無事よ  
岐阜に歸らるるなり直継常は是を悔むるゆゑ姉川  
より独りて信長を討んとす

其次よ出せる首をみると是ハ安養寺が弟よく彦六甚ハ  
と云老めて死バ一所と契やると先づらつる事こそ口  
惜くもとく首をとらまよとく其後ハわいのと  
かゝるよ秀吉其比ハ藤吉郎と云ら栗毛此馬の汗を  
とろ小諸鎧を合せ白沫かきせし馳来りいざ小谷へか

攻破るべしとひひは信長いやはとよかづる軍ハあふ  
なりとて許さるる秀吉後悔あらんわいのを急たあふと  
強もども信長ゆき入らしてさて止り安養寺ハ只首をとら  
らまよといひらまよも吾よ奉公せよとてははくならぬ  
ゆされらまよも降参せし遂よゆるさるる小谷よ歸らるり  
安養寺よ半とむらまよ信長軍を返されらバ浅井三  
年経る小谷の城落り其後安養寺浅井と京極と一族  
たり故高次よ仕へると若き時三郎丸徳門とてやれる

○高次ハ関東よ素より心を害らまよを大坂より朽木河  
内守元綱を使ひて秀頼公の外戚とて江戸大納言  
殿ゆもやうあまご人疑を散せん為よ幼息熊若丸



を人志ちふせしきりへしなり高次めらるる敵の  
色をも立ぐしとて止事を得ど熊若丸をゆして北國小  
軍をゆきまきりるが岐阜の城ちりしをゆして北國よ  
向ひしる人々大垣をけりし引返さるる高次水の庄  
より直は海津よかり九月二日の夜半は大津小歸立  
花宗茂筑紫廣門栗津陣せしを夜討せんと謀られ  
小思田伊豫同んせしとて止めさるる関寺の門を  
開城下の兵の糧を取入るる防禦の支度せしなり宗  
茂廣門石部より引返して勢多小陣取輝元の陣代毛利  
元康等八三井寺陣し久留米秀包南條中務を始し  
て三方七千餘四方よりおし寄せし中のみ宗茂の軍兵八

をけりし攻めし死人を多く越て乗入らるる防兼て  
京口の旗をちりりり多賀出雲守真先かけく堀を  
打破し三の丸の関を作てかけしひしとかり山田  
大炊赤尾伊豆足輕頭よ八井口左京大橋肥後安芸守門  
守使番山田三右衛門横山久内田中茂兵衛茨川口を固めし  
るよ京口より敵亂入しるば二の丸をさし引退く高次使  
を以て何とく三の丸をさして早く二の丸へ引取らや仕事  
添付らるるは防ぎぐるかるべしやく敵を追出せと下知  
せししるは門を閉し切るる山田大炊十文字の鎗此  
鎗を片手よるる由の上よりおし寄せしとゆり  
多く一乘由の鎗を合せ敵二人突伏しり此を山田大炊が



茨川口の鎗とせよ称しつり赤尾ハ狸之皮の羽折を以て長  
身の鎗より数人突伏せ山田三右衛門もあはれは戦ひつるが  
討死せん二の丸小引たる時山田と赤尾とかりつり六度まで返  
り突拂ひつる殿の振也目を驚しつる二の丸北門海よりく  
赤尾山田已下ふり止りつる時唯少斎門を出して関貫をさ  
り赤尾ちつともひるまだ長身の鎗をかてつるは二の丸の方  
へ足を投がし草鞋のひもを結び直して其武者振を敵えて  
少一きあつらふ時少斎門を突けバ中へ入事を得つり赤  
尾棄殺んつるよといひつる少斎敵追はてつる二の  
丸小攻入んとするあはれこそ門をさしてくれ各を助ん為り  
城の危き志もつるやといひつるはさばりの伊豆も答ふ

よ詞たのくりきり黒田次郎兵衛 尾子宮内安養寺長門三  
田村安右衛門今村掃部赤尾久助中井民部小豆掃部油井周  
防等ハ京口を防ぎつるが二の丸へ攻入敵と戦ひつり討死せ  
くまうつは銚子五郎兵衛ハ始関白秀次は奉公せしよあは  
まで酒をすすきつりある時朋輩は後りつるハ殿下のかえ  
よ立置まじり白熊色白く丈長一あはれ由曹の上よみじり  
かけく軍の先つけせん物をといひつるを秀次つて銚子を  
呼ぶ是を肴小酒を吞とつる彼白熊をあはれらまじりつるは  
銚子城よありがくく存いせハあはれつるやせし詞あつらふ  
まじりつるやらん若此後軍の何らん時先よせし詞をいふ  
せんといひつるが今日栗色の志が革よ金の筋つけし



羽折を忌かの白熊此雪の如くあるを曹の上ふらぶ  
かけ十文字此鎧を横へ尾関甚右衛門と共に乱れ入る敵  
五六人突伏く曹の鎧を傾け一足も引まじいぞと叫び  
討死ししり事君ハ異あまきども賜ひしる白熊よて  
敵味方の目を驚れ討死をぞ遂しり尾関ハ柴田  
勝家よ仕へが後高次北國より歸らまじし時尾関を迫  
づけ夜酒を酌く蜜はけやうまはるハ吾石田よ興するふ  
あらざる歸るく大津の城をもちらんとあななり敵のま中  
小勢を以て軍せん事尤も事なり汝が智勇を頼む  
と語らまじし尾関涙を流し人々いづらも中何と思  
召まじく斯仰れぞや此上ハニツたのくと答へるまじバ高次汝討

死せざまきやうが為よ命を捨んとおりの老多けれど謀を同  
どくまじる者稀よこそあまき汝偏よ討死とめまおひへるハ吾  
志よ非まじくいれまじし尾関かく身よあまき御前を承  
アまきハ骨をまきまじしものまじいれどこの堪がた事有しよ此恩よ  
報しなまじんといひしり此時銚子と俱よ戦死せり後高次城  
を出るまじる時赤尾と山田く高次の興此左右よ供しる  
まじく寄手の軍兵指をまじしかの大胆者よよく云はれり

一説よ伊豆茨川口の敵を追拂んとく出る時跡をバ  
弟の久助内田太郎左衛門多賀孫左衛門守りしを  
寄手まじしり攻る久助手負く吾ハ本丸より退人と  
内田笑もいへば昔熊谷か子の直家よすすまじ



ハ討死せよ痛手なれば自害せよといひし事耳笑あは  
身の詞たり爰を逃んとハ口惜き事よ大剛の伊豆が  
弟よ汝がめた人此有るこそ怪しくまこと罵りあり  
内田ハ銀の馬櫛を曾の立物小あくる銀の馬櫛よと  
あめりるやこれ物師あり敵今村掃部が持口を破りて  
乱まき入りしバ伊豆あり返り見く三の丸ハこれれとて  
引返り人々敵既ハ攻入りし入る方なり一京洲の丸よ  
入るやとてし伊豆少もひるまじ初知する所あり  
入なんこそやしくるべしとて鎗を提く敵は向ふ伊  
豆は後ふ者四十五人下終ハ皆逃散く伊豆が若黨一人平  
野藤き徳と云足輕一人残り留まり伊豆むり立し

敵を物ともせぬ城は十文字に追立さんぐよ戦ふ  
く小敵尚烈しく進み来りしバ尾関甚右衛門鉞子  
五郎兵衛二人土橋の上より合せ大音あはれく存る  
子細ゆりて討死するよ雲あて首をとめてて面もやぐば  
切死よぞしりたる其ひまよ赤尾そまを一つと行きて  
城際よ至る門の外に柵を篁戸あり赤尾篁戸をメよと  
いふを平野新助小篁戸をメしり門を関りあといひしバ  
少齋法師武者より門を固めくあうが矢倉より  
味方とは知しきと敵付入よはべし人ハ輕く城ハ重し  
爰こそ死すべきやなまもあやうに討死せしよ是よ  
見物せんといふ赤尾石よよりかりく息をつき九尺計



ある鎧を下し置く脚車のみもを結びおと敵簀戸を  
破り押しあさるを八十餘人の兵ども爰を限りし面も  
子々必突うる赤尾もづらふ緒をメ終つとつと立上り  
赤尾伊豆とは知らざりやと名をかく乱し入敵を念を  
突退け追出さす少敵矢倉より鉄炮を厳しく打出さる  
るまば立花の勢もゆる小まいつり防ましく引退くかく  
く少敵跪く鎧の穂先を門のくばり戸は當て一人づ  
静ま入るるありかゝるハ無禮よりへども門をぢり法あり  
といふ皆入終りく伊豆と平野と二人門外に殿してあり  
るるが平野ハ赤尾よまづ入よといふ赤尾ハ平野よ汝先入  
よといふ終り赤尾おこりこく入るるといふ

赤尾伊豆六美作が子なく信長に滅ぼす

信長江州小谷の城を攻浅井長政勢盡く既よ自害せ  
んとする時不破河内を以て縁者のよしと降参あり  
は疎えあつと云せしむる小長政降参も志よ非  
るを近習の士どもも別の子細もいまだ城をかく運  
を罷らまじへといふ所は父下野守も共よ疎えあつバ  
降参せんとして城をゆるを信長見ると長政何の面目有  
く今更の降参ぞと高声に呼むとやらせり六長政念  
て赤尾美作が宅に入て自殺せり浅井石見赤尾美作い  
が切死せんといふかけ入るるを多兵押隔り生取く信長の  
前よ出ると信長汝等の長政をすしめ朝倉ふくみ



吾を敵とすはあまざる果を足よと罵らむは浅井居直  
事新しきものを道ふの哉義景を別事なく立立  
誓文其血もいまぶかどらざる小越前軍をわ  
是よりく長政義の當り処より義景は異し今日城  
をよ疎まぬあはれとてつらつらとて刃を押し入り只自害  
と一とては決しとて若天運よよりく家を立るな  
らバ信長を斯のどくかめんとせよかく成り義  
を知り恥を知ざるハ信長こそ人面獣心なまことハ信  
長除怒く汝詞も似ど生こそまじくハゆめと罵ら  
るふ年老ぬまバ力不及は昔より士の生捕となれ  
事恥よりく武勇を以て敵を討たむといつらきま

ア人の國を亡はそを恥まこらるよ必下人は首を  
切るべしと罵りて信長杖を以て打つ石見  
打笑ひからあたる者よかゝるをいひつをいよき大  
將の禮儀うまいや犬坊と罵りておれが  
石見も是作も終に殺さむといひ  
伊豆の僧と成り多賀の匿ま居る小十二歳の時  
多賀明神の鳥居れをりあそ遊びたるをいづこの家  
の士よや十二人打連く通り小行あつて士怒り小僧め  
無礼なりとて拳あつて頭をうつ伊豆飛かり其士の刀を  
抽く只一打は切るをりつと走りぬけく赤尾よかくれ居  
ころころ後京極よ仕へたり



○立花宗茂使を城中タチバナノシノノよりきりて味方討死の中チカタノチノシノノは十時傳

右夷門ウチノカドとヤス者ありさうりさうり不便フビシは存るなり骸カラダを返り

多りのりくんとて物具の色を書カキく云送オクらまうりバヤがて返

ぬ又城中シノノより山田三右衛門ヤマダが首クビを返りめいさして望ノゾミま

うば曹カイトを添ソフく送オクらまうり此コトを大津オホツの死骸シガイ返オクりて勇ユウ十

死後シゴのちまれとく

○高次大津の城タカツクをちりて固カタりて高野タカノの木食上人

を以モツて和平ワヘイを執シツ行コウふ高次タカツクさうり同心ドウシンなりりりかさしめ

長臣黒田伊豫ナガノ寄手ヨシテよ心を通ツりてバカバカなく和平ワヘイとく

城シロを出イ京都大佛キョウトの養源院ヤウゲンインより立タちまうり高野タカノ小寺コジと

関ヶ原セキガハラ記キより三井サンヰ寺ジより三成サンセイ亡ナシく後ノチ東照宮トウショウミヤ高次タカツクを召メシくる今度

諸將シヨウシヤウ皆大功ダイコウ有アル一人ヒトをあるふ吾城オレシロ一ツ守モリてげざりり身ミは

立タちまうらん事コト口惜クチアワシとくからまじふ又使ツカサを以モツて御物語ゴノモノガタリあり

しき事コトあり尚出ナホらまうりハ我行ワレん年老トシノカイする身ミをさかせくま

んよりハ若役ワカヤクもと仰オホセ出イさまうり高次タカツク辞ジりてくつて出イれ

りり東照宮トウショウミヤ此度城ココノシロを攻ウケぐる敵兵オホツギヤ大垣オホツカよりイちかちか提ヒキあし

関ヶ原セキガハラの軍危イクシうるべきは九州キウシュウの大軍オホツクを数日スジツ隔ヘカらまうりゆ急

こが軍イクシの援タマヘとたうり事コト大津城オホツク中ナカ此軍兵コノイクシいほさうり関ヶ原

よ来キアうりも遙ハシカまうりて敵コトより乞コヒくる和平ワヘイあまは

恥ハまうりばと仰オホセらる大津オホツクよその事コトあまは近江チカマより四十万石

賜タマふべしとたりり高次タカツクさうりかく賞シヤウせしめさうりハ関ヶ

原ハラより大功ダイコウの人ヒトよハ百萬石ヒヤクマンシヤクを賜タマはるべしわおのひもさうりばと



固辞ツツシヤされけり

一説関ヶ原の軍敗イクサマテもしく 東照宮大津の城は入せまふ

山岡道阿弥供奉ヤマカミチアヤノミカドもしくが京極宰相よく持モチこころりよ今

少の事コトもく本意ホンイを遂トゲびてしやるもを御ミコト答コタヘ合アヒなく奥平ウツラヒラ

が長篠ナガシノもく武田タケダを防マカだしよ戸障子トシヅメは鉄炮テツポウの玉タマのめと

鹿の子カノコをゆひしるがめく土ツチも落ち板イタもぬけしをゆし

をさうたみタミを喜ウレしく持モチこころりよとぞ仰オホこゝる又高次タカツグの使者シヤシ

多賀孫タガノ左衛門大坂オサカも多オホありしるよ御前ミマエも召メカこく京口キヤウグチの

旗タテをよくちぢりし敵攻入セメイリしるしつる召メカこく仰オホ有アリし

うば口惜クツナリくなんよしいひく泪ナミダを流ナガしやゆりさして井伊本多イイホンタ

よ句コトひ下部シモのや木履キナも雪ユキのつもこゝるめくも御出馬ミデウマも

やぶれあんどヤブの如ごとき城シロは高次タカツグもまバこそ教シラシ日敵ニチキをくば

支サへりくといひりまきバ戯タシもこあぐり理リなりしとぞまへられ

しとせり

○立花宗茂タチバナムネモト大津オホツの城攻シロセは足輕アシケルも繩ナハだすまかけし其繩目ナハメ

よ玉茶タマチの早合ハヤカをまきませく箭ヤをつづよよりも早く鉄炮テツポウを

持モチせらるしり

又細川家ホソカワケの鉄炮テツポウハ口茶入クチカスリイを革カバもく今世イマヨのそれガも傳ツト

カめく造ツクアもく用モチふ事コトの急キツある時トキ指サシもくひり入イこ

利リあり又加賀カガの吉田大藏ヨシダオホクラとく世ヨもゆえしもそれガの射イ

手テはり常ツネも矢ヤを取トルく俄ニガもゆる時トキ十筋トスジも持モチこゝる事コトは

あもよ腰ウシもさせバ走ハシるよ落オチるよて草カもく角袋造カクブツツクアも



緒を付腰コシささげそれよ入コシて腰コシささり其名を標頭ハルカサと名付ナし

○會津ヒタは向カをせめし時伏見フシミの城シロは本丸ホンマルは鳥居彦右衛門元忠トリノキ二の丸ニノマルは松平主殿頭家忠松平五左衛門松の丸マツノマルは内藤弥次右衛門家長イノカタをかうせめし六月十六日東照宮トウショウミヤお立ちあひ十日伏見フシミの城シロは鳥居トリノキを召メシ今度士卒少くして残コト止トドメる事を仰有オホし元忠モトタカ臣シが存イる所今津イヒツハ強敵ガムテキなり一人なり成ナリ召具メシメせられて然シテるべし伏見フシミは臣シ一人より事足コトタリし世上トウジヤ毎メ日ジたうしごとく変ヘの出来人時ハ近國キニツクは援スカふべき味方ミカタもいかに今イマの十倍ジウバシ北軍兵を残りコノ至オりしりとも防フセぐべきやうに六むとちりるふ東照宮トウショウミヤ黙モクしとおもせしやう有アて駿州スズマ

宮ヶ崎ミヤガサキおとく士シは成ナリし時彦右衛門ハ十三トシヒトサより初ハジメてせしりし年トシ久キウくもなりぬとて御物治ミモノヂは夜ヨのうらみぬくも元忠モトタカ會津ヒタの御田守ミタノモリ世ヨは変ヘなくいひあるは復ニタ御目見ミメミエも仕シあるゆゑ事コトありバ今夜コノヨぞ永ナガき御別ミワケまらしていとやう座ザを立タテゑし東照宮トウショウミヤ御袖ミソデをりて落オチる泪ナミダをおもひてぞありしりるかくく石田兵イシダヘイを起オコせしりバ伏見フシミを攻ウケべきやと評ヒヤク定サりたるは増田長盛マシタナガサキ城固シロカタうしてありも内府ウチノノの内ウチは名高ナタカなりゆもあればききさく落オチべり先マシよりりく見人ミとく山川半平ヤマノカハを使ツカヒしり元忠モトタカ對面タイメンすまは増田マシタがやうは今度イマタ輝元テルモト秀家ヒデアキ景勝カゲサツ徳川殿トクヰノミヤと弓箭ユミヤをとる九州中國クウシュウチュウゴクの諸大シヨウダイ名ナ皆ミナ同心トウシンせしりまは此城ココノシロを精取セウキせんべし長盛ナガサキ久キウ



く徳川殿の御あしこしと深くは此事然るべしと存は  
しむる思慮の及ぶまじきに伏見の城ハ太閤まじり  
まゝ今徳川殿姑くあづかりておぼしませバ徳川殿の城と  
すべきまじり城をわく内府は忠を致さる道あるん  
と存るより云送られバ元忠聞て了り内府會津に向ひ  
一時かく守りしとやては敵小渡の事ハ存もよきに  
増田及ハ内府よまじりみ有ゆある事を述べし旨心得ら  
まじい君おめくと城を渡さんとは同くハ城を枕させよとの  
使しとまじりいとも泰しとすべしとて城をわよとハ武將ハ  
詞ハあまじき事とも存せはしとてあまじしと討死せん  
と告へしをわく長盛は告るかへは渡邊勘兵衛あつが

はしりて感入る頻は涙を流しければ長盛も我と  
をき人を殺さん事のためしとて共は涙を流し  
しそかく二万餘りの衆を四方より攻めよしといひ  
まじ十日余防ぎりし甲賀の者内通して七月晦日の夜  
松の丸は火をかけし寄手力を得て攻入り内藤ハ精  
兵れまじりしと詰り詰射る矢は死人数をまじり  
終り内藤父子も討死し主殿頭五左衛門を始りて残る  
切死せし忠本丸おめくと門を開き門際より  
六七間まじり士卒三百餘白刃を抜そめとまじりか  
つて待けし寄手あつて攻入兼くきめしひらるる元  
忠大音あげ一人おめと敵を討く死せし士のお志あまじ



三方ヶ原まで足は手負ひ行歩心はまうせざしども逃人と  
せばこそ足をも頼まめいざ最後の軍せよと下知する声  
聞く一同は切く出面もふくさ戦ひく一人も残らば討死  
しつゝ元忠戦ひ疲まらく玄関は腰をかけ息はぐさよ  
雑賀孫市重次死骸を踏越くすみよまじバ吾ハ鳥居彦  
右丞よ首取る功名よせよとて物具脱で腹を切り  
うば雑賀其首を取らりり本丸は二の門ありけるを大  
手の外はな堅く鎖しければ一人も逃ちる者なく  
討死しつゝ後元忠の首を大坂京橋は梟せしを京の  
商佐野四郎右衛門と云とのる居よとみあがる忠  
義の人れ首を悪逆の罪人と同づくはらむとみやあれ

とて夜深に盗取智恩院は葬りて一字を建龍見院と  
名付しうば石田の必定期討たせしせんあは事なりと  
云く者あり佐野吾久しく恩を受く身たすバ白刃を  
ふむまごころなうめ是程の事ハ人の義なり義あは  
禽獸なり人生く死せざる事なり刑罰ふあは事  
ちつとをくくべとぞいひける

雑賀孫市後水戸中納言家は仕へしりがある時中  
だちを以て鳥居忠政のりし云送アくるハ重次むじ  
伏見の城まき元忠北御家野にありあは其時の御  
物具吾家取傳へりひぬ先考の法形見よては法見せ  
ん為をくまをせ度こそり人とりし忠政悦んでたつた父



ガ形見是ふるべり〜一日見をやと答ふ重次自ら携て  
ゆき向ふ忠政門外に出迎へ重次を奥の間に招き亡父  
は再對面の心地さして涙を流し甲冑太刀刀柄板の  
上よかた居く是を拜しさて今日重次を饗せしむるに  
誠よ美盡せり其翌日重次の方小使を立昨日の見参  
を謝さて又重次の御志よよりく父が宸後よ帶せし物具  
再びんら奉じまじも悦入存ひひぬ忠政が奉じ傳へ  
父が形見よ見るべき物もさくなく見苦しくハハ〜  
此物具重次の家よ〜めくは武名を子孫よ傳へらま  
ん事弓筈れ道よハよた御遺戒のりやルべきこと甲  
冑太刀か〜な〜く〜遣り候そま〜り年毎よ

冬綿厚く入〜衣五領使者よわ〜せしてを〜  
水戸よ贈と遣ハ〜音信を通ぶる事忠政二期の  
終よ〜水戸公此由〜口大よ感〜  
鳥居が使者の来るべき前道梁を修理させ重次よ  
客儲さ〜魚鳥や〜の物賜ひ〜

○筑前中納言秀詮先陣の士大将平岡石見松野主馬各  
禄一石なり伏見の城攻よ主馬が仕寄の竹把を城中より  
火箭を射うけ焼〜は其所を退き〜竹把を付  
んといへとも村上三右衛門入を焼跡よ竹把を付〜  
ハ何〜主馬と相謀〜竹把を付直〜竹把  
の上よか〜土をぬ〜べき用意〜主馬外よ知事



嫌ふ人々ハ士々りしも内もく士をこゝらまじよ又士をぬ  
こゝろん老よハ中間下人なりしも士とせんと下知しん  
バ下終八人出く士をぬりしりしバ其後升把を焼かり  
りしりしより旗本より大鳴源二といふ者使よ来り仕寄場  
より堀端まで間数幾許あると向ふよ村上間を打て八見  
れに九十二間許のやあんと答ふ大島といふの事ハ間  
を打んといふ城近く箭玉の飛来する所強きを知し何  
の為ぞといふ源二殿は向まらるゝ間をうしんは  
快うしんぞといひしりしバ村上旗本の使ハ先陣の間をう  
する事ハ有まらしりしりし村上静ふ出く竹を間等よ切一間づ  
り源二先へ出りしりしりしりし終まバ十間半之

大鳴村上進退のふるまひ見物なりしと云ありし源

二六廿二歳伏見落城の日討死しりしりし

○三刀谷監物孝和ハ其先祖兼久の亂ハ軍功有りしりし出雲の三

刀谷の郷を賜りしりしりしりし氏とてしりし其末雲外尼

子の旗下ハ屬しりしりし孝和が父彈正左衛門久扶毛利家ハ奉

公しりしりし後仕を止て終りぬ孝和ハ吉田兼治よたよりし

吉田ハ居しりしりしを関ヶ原の附安國寺北村五郎右衛門を使

みしりしりしりしりしりし聞入しりし細川幽齋の丹後田辺の城

よりしりし力合せんとしりし従者ども奥州ハ大國なりしりし景勝ハ

勇將なりしりしりし破るべき西國一同ハ石田ハ興し

りしりし徳川家の危き事近きりしりし何とて安國寺ハ招を







幽齋かへふ

浦をひうりてとてくむまのあけてふらたかへき波哉  
一説藤原公國卿早世ありて其子実條卿幼りてらば  
和歌の口傳を幽齋は傳へらまらり後よ函致実條卿を  
田辺北城に迎へてりて養育し悉授けらまらり古今集  
の説ハ未傳へらまらる中ハ朝鮮征伐の事記ありてらば  
弓矢名所ハ討死のわざとらりかへてとて古今傳  
授の事書ける書の箱を鳥九大納言光廣卿へ贈らま  
預けまらる間、乾祥は後と若討死せば実條卿へ渡  
しつらりてとて添らまらり歌

人の國ひくや八をぬも作りてふとてひかへせおの浦浪

ゆもまかた集あるはとめてむしよかへせおの浦波

光廣卿のかへふ

あ代をちりひりての後志まいてりあけんう病りてと  
其後秀吉遺言して豊後旧杵を函致の男忠貞よかへ  
あへらまらりば光廣卿より宮とかくは

いふとてぬくひもありてとておあふとてひくは海島波  
幽齋田辺の城をちりてし勅命よより三條大納言實  
條卿へ附し傳へらまらり一首の歌あり

○古田助左衛門ハ古田兵部少輔重勝よ仕へて禄千石を受く  
景勝を征伐の時重勝伊勢の松坂北城に助左衛門を置き



たり三成岳を起せし時大坂の重勝此屋敷をとりつゝかきみ  
松坂の城を渡らばハ重勝の北北方を殺害せしむといひ送  
りし小助左衛門此城ハ殿の仰たつて人ハ渡らん事存じ  
よる若さあつてハ北北方害みあひのちんちや誠小つて  
し事なまきてもいふせん妻子の死さるるが悲しむとて城  
を敵ハ渡せしと殿を人殺すべし運辱しつゝ死を潔く  
さる事弓筋しる身の習ひなり人々ハ大坂の屋敷ゆて  
いふもぬら敵やぐて城よまらばあつて軍しつゝ討死し  
冥途より対面せんと大坂の屋敷よ云送りつゝかきみ  
重勝も東國より歸り来り松坂よきてと籠る此時富田信  
濃守信高阿濃津を守らまつが加勢を重勝よ乞ふ兵を

命ちやるべき体のためりつゝ小助左衛門阿濃津ハ加勢あつ  
ん事尤望むをり敵阿濃津を攻く其後爰よ攻未らん若  
阿濃津落さるる小東方の味方来らば敵敗北せハ其時は  
古田が士ハ敵の旗をぶふ富田が力あつて松坂を持つり  
たのじん小笑つていふべし又加勢あつて隣國相後ふの義小叶  
ひ又阿濃津あつて敵を防ぢハ古田が加勢の故なりと世小  
申はべしと初めつて五百人の軍兵を阿濃津よりつゝや  
て重勝の領知れ百姓の中ハ大家ある者二十人を士とせ  
城よつて後小百石の地をあつていふべしと約しつゝ是人質の  
心よく百姓をさるがせし術あり関ヶ原の乱治しつゝ後  
重勝約よ背んとせしれつゝ小助左衛門信を失ふハ君の道



取あつたにんかゝる言葉ハ金石キシキよりも堅カタくさるべき事なり是  
より後ノチ又欺ウソんとく百姓ヒヤクシヤウども何事ナニゴトも皆入キらり信シなくバ  
立タててこや事コトの仕シ臣シが禄地ロクヂを分ワちあつてふべいとひはれバ  
重勝シカガ約ヤクの如ノくせつれり

常山紀談卷之十四終



